

ジェンダーフリースペース通信 8号

GENDER FREE

PRESS

〒195-8585

東京都町田市金井町2160

和光大学G112(G棟1階)

044-989-7777 内線4112

www.wako.ac.jp/gender/

2006. 7. 21 発行

・・・自爆バービー人形にあなたは何をみますか？
7月12日、異文化交流室でパフォーマンスを行ないました。

アートパフォーマンス 『テロリストたちの祝祭』

腰に巻きつけた爆弾はアメリカを象徴するコカコーラ。自爆という行為に向かう女性の揺れ動く感情。殉死した女性の死に顔にする化粧。無から創りだされるパフォーマンス。物語のないイメージによる世界。大道具も小道具もほとんどないところ



でキタムラアラタさんと早乙女宏美さん、お二人の演技の
みが「自爆テロリズム」の演
劇性を表象する。その演技力
と最後に壁面に映し出された
サイトのなかの女性や子ども
の殉教者たちの表情が重なり
合い圧倒された。イラクやパ
レステイナ、イスラエル、中



東で増え続ける女性と子ども
もの「自爆テロ」。そのリ
アリティのなかに演劇性を
見出し、パフォーマンスと
の境界が見出せない日常の
世界は私たちにとって遠い
世界なのだろうか。

早乙女さんは1980年
代にポルノ女優として活躍
した人で、巫女的なイメージと演技力に惹きつけられ
た。キタムラアラタさんは97年から、東京と海外（ニ
ューヨークやプラハ）を往復する国際的に活躍する若
手の演出家であり、日本演出者協会の「国際演劇セミ
ナー」コーディネーターや国際演劇協会（ITI/UNESCO）
の国際議員や、日韓演劇交流センター理事などを務め
ている方だ。文化庁在外芸術家派遣員として2年間プ
ラハで演出助手の仕事（ロバート・ウィルソン演出『運
命』など）のほかに、いくつかのパフォーマンスを発
表し、2001年には、モスクワ（ロシア）での若手
演出家研究会にて最優秀演出者に選ばれている。

このような優れた演出家をジェンダーフリースペー
スの主催でお招きできたことを喜び感謝したい。少し
残念だったのは、30名近くの参加者で教室は一杯だ
ったが、パフォーマンスの空間が狭く、適切でなかつ
たことと、もっと多くの学生に見て欲しかったことだ。

（人間関係学科・船橋邦子）

『シンポジウム ジェンダーの視点で読み解く現在』

和光大学総合文化研究所とジェンダーフリースペースの共催で、6月28日、「ジェンダーの視点で読み解く現在」と題するシンポジウムを開催した。現在、日本では、憲法や教育基本法の改正論議のみならず、ジェンダー・バックラッシュが加速化し、戦後積み重ねてきた「平和」「平等」「人権」などの価値が、揺らぎ始めている。こうしたバックラッシュの背景に通底する問題は何かを、ジェンダーの視点から解明したいという趣旨で、学外から、若桑みどりさん、山下英愛さんをお招きし、本学の船橋邦子さんと3人に、お話をいただいた。



左から若桑さん、山下さん、船橋さん、井上さん

若桑さんの「ジェンダーの視点で読み解く戦争表象」では、敗戦後1980年代頃までに制作された戦争映画は、「ひめ

ゆりの塔」「人間の条件」「きけ、わだつみの声」「戦艦大和」「戦争と人間」「黒い雨」など、反戦的な色彩が強かったが、9、11以後、戦争を美化する映画が数多く登場してきたこと。戦争映画における女性表象は、戦時中の「息子を国にささげる母」、戦後の犠牲者の典型としての「若き乙女」像から、最近の「私たちの大和」では、「女を守るための」「戦争というレトリックへと変化してきたことを、映像をまじえて説明された。

山下さんは、1990年代の民主化以降の韓国で、女性学と女性運動の進展を背景にした、政界、法曹界、軍・警察等における政策決定過程への女性の進出がめざましい状況等を、数値を挙げて紹介し、政府組織としての女性部の設置、性暴力防止法、女性発展基本法等の制定、戸主制廃止など、最近の「韓国社会とジェンダー」の状況について、お話しした。

船橋さんは、「ジェンダー政策とバックラッシュ」と題して、日本のジェンダー問題の現況を数字を挙げて説明し、アメリカ主導の世界経済システムの再編強化である『上からのグローバル化』と、「下からのグローバル化」としての女性人権運動の広がりとのせめぎあいの構図が、バックラッシュの背景にあることを指摘された。

討論では、日常生活における暴力と戦争とを結び付けて考える必要があること、韓国の状況も、日本のバックラッシュと無関係ではないこと、一国内で問題を考えるのではなく、世界の他の国々の状況と関連づけて平和や人権、ジェンダーの問題を考えるべきことなどが話し合われた。

300名近い参加者で、J301教室がいっぱいになった。3人の講師のお話がそれぞれ盛りだくさんで、討論時間を短縮せざるをえなかったが、直後の懇談会で、学外からの参加者も含めて、白熱した議論がなされた。



一兆三〇四〇億四二〇〇万円。平成一七年度政府予算に計上された少子化社会対策関係費の総額である。ここ数年来、これとほぼ同額の予算が奮発され、「エンゼルプラン」・「新エンゼルプラン」や、少子化社会対策大綱とその具体的行動計画である「子ども・子育て応援プラン」などといったかたちで、政府の少子化対策は大規模かつ継続的に実施されてきた。しかし、これらの施策はさしたる効果をあげることなく、出生率はいまだ下降線をたどっている。ここで、少子化対策について政府の政策評価を行うつもりはない。ただ一点、内閣府が少子化対策の一環として『少子化社会白書』で取り上げた「安全で快適で満足のできる『いいお産』」について考えてみたい。

子をもちたいと望み、幸いにも妊娠・出産と事態が進展していった場合、女性には、出産に関するリアリティが次第に増し、どのようなお産をしたらよいのか、どのようなお産が可能なのか、みずから考えていくことになる。

しかし、考えるといつても、分娩場所を選ぶという基本的な選択においてですら、病院・助産院など、その選択肢は数多い。まして、出産前後のさまざまな局面における各種の選択肢をすべて考慮することなどできないし、そもそもすべての選択肢を知りうることは不可能である。たいていは、自宅または実家の近辺にある、比較的評判のよい産科医院が選択されるのではないだろうか。しかし、その結果として、「いいお産」ができる保証はない。

WHOが一九八五年に作成したレポートには、出産にかかわるテクノロジーの適切なあり方について、二一の推奨項目が盛り込まれている。現代社会における出産のあり方を考える出発点となったこれらの事項は、二〇年という時を経て、EBMが進歩を遂げた現在では、歴史的な意義を有するだけである。しかし、そのなかには、たとえば陣痛中の碎石位は強制されるべきでなく、分娩体位は産婦が決めるべきであるといったことなど、現在の日本ではいまだ完全に実現されていないことも多い。むろん、分娩に立ち会う医療者が、みずから最良と信ずる方法で分娩を介助することは当然である。したがって、かならずしもWHOの勧奨にしたがう必要はない。しかし、であればなおさら、どのようなお産がなされている、どこでどのような出産が可能であるのかという情報は貴重なものとなる。

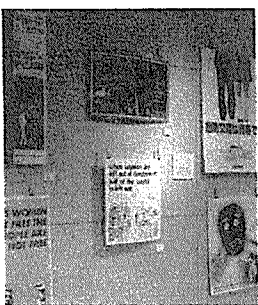
「リボーン」は、ライター・医療者・研究者など、さまざまなかたちで出産にかかわるスタッフによって構成されたネットワークであり、同名の情報サイト (<http://www.web-reborn.com>) を運営している。同サイトにある「産院リスト」には、施設ごとにサーヴェイされた出産前後のさまざまなケアの内容がデータベース化されている。生む場所を決定するうえできわめて役に立つ情報だろう。と同時に、どのようなスタイルでの分娩が可能なのか、それを総合的に学習する最適な場にもなっている。多様な選択肢を一覧することで初めて、自然分娩のみが「いいお産」であり、帝王切開は「悪いお産」であるといった極端な自然主義に陥ることもなく、逆に、医療上の安全性と産婦の自由意思とを相反するものとして捉え、前者を優先し、後者を切り捨てる過度な医療化にも与しない、みずから立脚点とした満足のいくお産を思い描くことができるようになる。そのためにも、子をもつと決めものにとつて、同サイトの閲覧はきわめて有益である。

産婦にとつて満足度の高いお産を実現するために、全国各地の施設におけるさまざまな取り組みが知られるようになれば、出産スタイルの多様性が広く認知される。そのような多様性に対する理解は、出産以降の育児や子育て、さらには夫婦のすがたや就業形態の多様性に対する認識の深化にもつながっていくだろう。こういった意識が醸成されることによって、政府の各種少子化対策はよりいっそう実効あらしめられるに違いない。その意味からいえば、同サイトは、子をもつと決めたら見るだけでなく、子をもつか、もたないか、その判断材料ともなりうるものだろう。(B学科・杉本昌昭)

『ポスターに見る女／男』

毎年恒例となった展示イベントを6月5日〜6月9日の期間、大学図書館梅根記念室にて開催しました。今年は男女共同参画センター横浜より国内外のポスター(計36点)をお借りして、そこに秘められたメッセージやデザインからジェンダー問題を読み解き考える機会になればと企画しました。

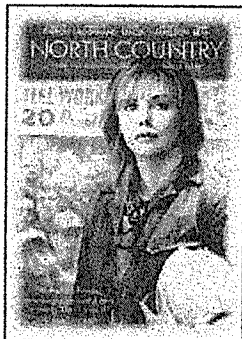
意識啓発を目的とする(国際女性デー、婦人週間(男女共同参画週間)から、労働、男性の育児参加、DV、メディア、人身売買といった幅広いテーマのポスター)を展示しました。会場に寄せられた感想でも、ポスターの種類が多いことに驚くと共に、身近なテーマとして共感したものが多かったです。



『初夏のジエンダーフリーシネマ』開催 5月31日～6月16日

初夏の「ジエンダーフリーシネマ」のなかでも、ストリートで熱いメッセージに感動した映画が「スタンドアップ」だ。

アメリカ北部(ミネソタ州)の鉱山での女性へのセクシアルハラスメントに対して立ち上がった女性たちの物語。まずすごいのは、これが「実話」だということ。だって、こんなひどいセクハラなんて! 映画をみながら、思わず「許せない!」って叫んでしまった。仲間の女性たちが怒りを声に出せずにいるなかで、子供を育てるために鉱山労働者になったシングルマザーのジョー・ジイは立ち上がる。セクハラ集団訴訟を起こそうとするのだ。孤立するジョー・ジイ。ああやっぱりだめなのか...そう思った瞬間、いつも家父長主義的だった父親が「娘のために」立ち上がる。やがて、女性労働者たちが次々と「スタンドアップ」して...もう本当に胸が熱くなった。



それにしても、「モンスター」に続く熱演の主演女優シャーリーズ・セロンといい、監督のニキ・カローロ(「クジラの島の少女」の監督でもある!)といい、性差別と闘う元氣の出る映画を作ってくれた女性たちに乾杯!

(共通教養「女と男A」・堀田 碧)

・ワークシヨップ『自分の進路を考えてみよう(仮)』

【一〇月二三日(金) 午後三時〜】

キャリア・カウンセラーの疋田奈緒美さんをお迎えして。
・講談独演会『タイトル未定』

【一〇月下旬】

講師の神田香織さんをお迎えします。

*この他にも色々計画中です。学内掲示・チラシを見て、是非ご参加ください。

和光大学

本棚から

『家計簿の中の昭和』(『本の話』収載)



澤地久枝著 文藝春秋 2005年

昭和史についての先鋭的な仕事をしてきた澤地の同名連載が、この7月号で17回をむかえている。二ヶ月に一度ぐらい、土曜日の図書館で、ポーっとしながら、出版社のPR誌群を拾い読みするが、そのときに見つけた。

澤地久枝、中野翠、大島弓子といったところが「最頁で、かつて森まゆみは5本ぐらい連載があったのに、最近はどうしているのかと心配したりもする。

澤地は編集者時代を経て物書きになった人だが、五味川純平の助手で鍛えられ、向田邦子との交友や、自身の病氣、家族のことが綴られ、その時々のお費、物価の様子が併記されていく。

17回目は1972年の頃、最初の本『妻たちの二・二六事件』を上梓し、向田から紹介された店で自分の原稿用紙をつくる。「百冊八千円。一枚二百字詰め、一冊百枚で一万枚」。

物書きとして自分の署名の入った原稿用紙を作った喜びが、さりげなく数字で語られている。彼女のいつもながらの冷静な観察眼が、自身の生活にもきちっと届いている。そうでなければ家計簿なんて何十年もつけていられないだろう。一月の小遣い帳でもつけられない私は、妙に感心してこの連載を楽しんでいる。もう少し収入についても知りたいと、のぞき趣味もたちあがつてくる。

(芸術学科・三上豊)